

## 『語用論研究』の20周年にあたって 美しい砂の山をきずくために

会長 加藤 重広

日本語用論学会は、1998年10月に設立の呼びかけがなされ、同年12月5日に第1回大会を開催し、2018年12月をもって設立20周年を迎えました。2017年12月には第20回記念大会を京都工芸繊維大学で開催し、成功裏に終えました。学会誌『語用論研究』は、学会設立の翌年1999年度に創刊号を出し、2018年度に刊行される本号が第20号にあたります。また、2018年3月にはStephen C. Levinson先生をお招きして京都で特別講演会を開催しました(本号には、その梗概が掲載されています)。設立から20年を閲した2018年12月には第21回の研究大会を開催し、300名に迫らんとする参加者を得て、これも成功裏に終えました。本号刊行が、学会設立20周年のとりをつとめるイベントにあたると私は認識しています。

私は、故小泉保先生、澤田治美先生、山梨正明先生、林宅男先生のあとを受け、2016年度から2019年度まで学会長を務めます。この間、前期執行部から引き継いで、いくつかの課題に取り組み、各種規程の精緻化、ニューズレター・発表論文集・大会要旨集などの完全ペーパーレス化、組織運営の効率化、学会財政の健全化、若手研究者の支援などをおこなってきましたが、まだ道半ばのものも少なくありません。

第21回大会からは発表賞の制度を導入し、今後語用論の研究をになってくれるであろう世代の支援を始めています。『語用論研究』は、再査読方式を導入して、改稿によって掲載できる内容と水準を具えた論文を積極的に採用する方針を決めています。もちろん、若手に限らず、会員が広く研究成果を発表できる場を提供することが学会誌の役割ですから、会員のみなさんの投稿をお待ちしています。会員の論文が掲載できないくらい集まることを願っていますが、これまでのところ、それほど競争率が高いわけではありません。編集委員会としてはわびしい事態ですが、投稿を考えている会員にとっては好機といっていでしょう。書評論文や企画論文を次号送りにしようかと悩むくらい投稿が増えることを望むばかりです。

第20回(2017年12月)の記念大会では英国からJonathan Culpeper先生とChristopher Hart先生をお招きし、国内外から講師をお招きしてシンポジウムを開催しました。特に、中国・韓国・台湾から講師をお呼びして東アジアの語用論という企画ができたことは重要なできごとでした。第21回大会(2018年12月)では、国内の著名な研究

者の参加を得て「語用論グランプリ」という企画を行いました。事前の心配を吹き飛ばすほどの盛況で、みなさんに楽しい企画で勉強にもなるとの感想をいただきました。

学術研究は、言うまでもなく、先端的かつ独創的な成果を相互に出し合うことで高度化していくのが望ましく、研究レベルが高いことは誇るべきことです。学会も優れた成果を披瀝しあい、それをもとに参加者もそれぞれの研究を発展させる契機を得る場になれば、その役割を十分に果たしていると言えるでしょう。このことは、学会発表の形式にも、論文という形式にも、同じようにあてはまります。

ただ、研究のレベルを高めることだけに腐心していればよいのかと最近考えることがよくあります。山の頂の高さが研究レベルなののだとしたら、山頂にいくら土砂を積み上げて安定せずに崩れてしまうでしょう。安定した高さを得るには、裾野を広げる必要があります。ちょうど、富士山のような成層火山をイメージすればいいかもしれません。砂山を高くするには、砂の体積を増やしつつ、裾野を広げながら高くしていくのがもっとも確実な方法ということになります。研究の裾野を広げるということは、語用論に関心を持つ人を増やすということにはかなりません。これは、言語研究者でも、言語以外の研究者でも、学生や一般の方でも、広く関心を持ってもらい、語用論について知ってもらうことが、研究の裾野を広げることになります。

研究の裾野を広げることは、安定した高さを確保することだけにつながるわけではなく、別の面でも大きな意義を持っていると思われます。語用論は、非常に間口が広く奥行きのある領域で、さまざまな研究を特に分け隔てることなく受け入れながら成長してきました。そのため、言語学プロパー以外にも、心理学・社会心理学を含む認知科学、情報工学、社会学、哲学、論理学、人類学、歴史学、文学理論を含む思想研究など、さまざまな分野と関わり、それらの知見を貪欲に取り込んでいます。さまざまな背景や出自をもつ研究がバランスよくまとまっているときには問題が表面化しませんが、一旦バランスを崩すと雑多な領域の寄せ集めのようになり、ときに空中分解しかねない危険性ははらんでいます。そのような事態に至らないようにするには、私たちが自分の専門に狭く引きこもらず、他の研究にも関心を持ち、自分の専門を広げながら刺激を受けて発展させていくための不断の努力をしなければなりません。そうすることで全体として、広がりが高まりのバランスがとれて、語用論の旗印のもとに結集した私たちの研究も一層発展するものと信じています。

今後は、会員のみならず個々の研究の営みに加えて、研究全体のレベルを上げることと裾野を広げることをバランスよく進められるような、地道な学会運営が必要だと考えています。学会の両輪は、研究大会と学会誌『語用論研究』の刊行ですが、それ以外の活動も含めて、できる限り均衡のとれた発展をめざしたいと思います。持続可能な発展目標(SDGs)を掲げて頑張らなければならない時代ですが、『語用論研究』20年目の節目に際して、日本語用論学会もこのことを意識しながら努力したいと思いを新たにしているところです。